

叶 釗

YE, Zhao

「観る」庭園における山水画構成に関する研究

The composition of water-ink painting in Japanese gardens

1. 緒論

日本庭園も中国庭園も、東洋庭園の一部をなり、いずれも自然の景色をモデルに、その美しさを抽象化、簡素化して造られる。山水画というものも、自然の景色を墨一色で見事に描いている。日本と中国は一衣帯水の隣国であり、弥生時代後期から様々な文化の交流してきた。鎌倉時代には日本と中国（宋代）との交易が盛んになった。中国宋代は文学などの芸術や思想などが大いに発展し、日本との間で禅僧の往来が盛んになった結果、水墨画も禅とともに日本に入った。室町時代、禅林文芸の興隆と五山文学の影響で、詩軸と水墨画は臨済宗の禅僧達によって大きく発展した。この頃、禅僧たちは「世の真理を表れである自然を身近に取り込む」ために、禅書院に庭園を造って、庭園を眺めながら修行をした。

この「観る」庭園は、造園者の日々の修行のためのものであるとともに、禅や芸術などの文化的側面を含み、美意識にもあふれている。特に、この造園者は衆に抜きん出る水墨画芸術を完成させていることから、多くの有名な庭とこの水墨画を対比させ、そこにおける独特の「構図」を通して、それらに共通する美意識を見出すのが本稿の目的である。また、その延長線上に、作庭をも試みる。

2. 研究方法

三つの室町時代の有名な「観る」庭園、大仙院の庭、万福寺の雪舟の庭、龍安寺の石庭と南宋の山水画、雪舟の山水画、牧溪の山水画を対比して、それらの共通点を見つけて、「観る」庭園における水墨画構成の基本概念的構築を模索する。水墨画構成法を利用して庭造りを試みる。

3. 室町時代に五山文学の影響で山水画の様式

中国と日本の交易が頻繁になると、大量の唐物が流入して、宋元画を主とする唐絵も渡来した。中世において貿易以外に、禅僧によっても大量の中国の絵画が運ばれてきている。山水画は新しく伝ってきた禅仏教とともに特に武家層に歓迎された。

宋代の郭熙は『林泉高致』を著わし、山水画の基本形式

である「三遠」の法則を確立した。

「三遠」とは「高遠」「深遠」「平遠」を指す。山すそから山頂を仰ぎ見るのが「高遠」、山の前から遠い山を覗くのは「深遠」、近い山から遠い山を眺めるのが「平遠」である。彼は北宋山水画の様式を確立した。

4. 実験製作

筆者は中国の広東省の鼎湖山の景色に魅せられ、しばしば訪れた。そして、鼎湖山のまわりの景色を何度も観察するうち、この景色を山水画構成法で描いたのち、それにもとづいて、庭を設計した。筆者が非常に気に入っているこの鼎湖山の景色は、静かな川が流れ、また眼下に島が見える。

「三遠」法を利用して、鼎湖山の静かな川が流れの風景をテーマにし、また壮大な島や雄々しい山の景色をテーマにしている。



1. 島の中に山景色(七星岩) - 「高遠」法



2. 目の前に川の景色(飛水淵) - 「平遠」法



3. 山頂から谷を眺める景色(蝶の谷) - 「深遠」法

渋谷 黎

SHIBUYA, Rei

変容する場として、移ろいゆく建築

Construction as transforming place in the future



図1:変容する場としてのメタファー

人の行為から機能的な現代建築を捉え直してみる。人が建築において、ある行為を欲する場合、まず行為に必要な部屋に行き、その部屋の行為に即したモノを使うことで完結する。

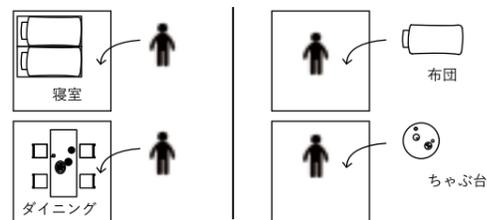
つまり、人の欲求に対し、先行して行為の場が用意されている。これらの部屋を効率的に並べ、積み上げたものが現代建築ではないかと考えた。

しかし、この「場が先に在る空間」は用途が先行しているが故に、違う用途での使用や、外部空間の変化などに対応できない。

一方、日本の伝統的な建築空間は、ある行為をする場合、行為に応じたモノをそこに用意することで空間がその行為のための部屋になる。この「場が後から生まれる空間」はそ

の時の状況によって空間の用途を変え、建具等で必要な大きさの空間を作る。

これは、先に存在する固定化された場に対し、変容する場である。この変容する場を現代の建築に落とし込むことで、新しいライフスタイルを生み、建築の様々な問題に対応するような建築の原型を作る。



建築を作り出した人は快適に過ごす為に、様々な要因に適合するように発展させていった。建築の発展は、いくつかの条件によって大きく左右される事となる。

これらの条件を、ファッションデザイナーである石津謙介が服の着こなしについて発案した、TPO-time(時間),place(場所),occasion(場合)の考えを元に、『風土』『時間』『場合』の3つの条件を建築の成り立つ条件と定義付けたい。そして、各条件の差異を見て行くことでより明確に建築を区分できると考えた。この『風土』『時間』『場合』の3つの条件は、

風土→時間→場合という順の構造を持つ。

例えば、世界各地に見られる、何かしらの神を祀るための建築が生まれる場合、まずその場所の『風土』によって山や、海、風、雨、といったその土地に纏わる自然の恩恵や、脅威が存在する。そこに『時間』という技術進歩や文化的発展が加わる事で、祀るといった行為が生まれる。さらに『場合』がその行為を神殿や社といったものへと形状化する。このように、建築が作られる時、『風土』『時間』『場合』という3つの大きな条件に関わるといことが分かる。



図2:移ろいゆく建築の原形

空間について、過去の哲学者、数学者、物理学者がさまざまな議論を重ね、現在アインシュタインによる空間と時間を合わせ持つ4次元の概念が一般的であるが、建築空間における空間概念としては大きく2つの概念を元に考えられる。

一つは、万有引力の法則で有名なアイザック・ニュートンによって提案された絶対空間という概念である。絶対空間とは、空間は3次元ユークリッド空間であり、『あらゆる事物に先立って存在し、あらゆる事物に関係無く常に不変、不動な無限の容器である』と説明した。

一方、ニュートンと同時期にもう一つの概念を提示したのがゴットフリート・ライプニッツである。絶対空間に対してライプニッツは、相関空間と呼ばれる概念を提示した。

相関空間とは、『事物の存在に伴ってはじめてそれらの間

に生じる関係、あるいは秩序である』という概念であった。つまり、先立って空間があるのでなく、事物同士が同時に存在する事でそれらの間に生まれる関係性を空間であると唱えた。この概念のような事象は日本建築、神道の領域によく見て取れる。

このような空間概念は、前述した、風土によって発生し他のものである。現在の建築空間の考え方は、絶対空間によるものだが、そこに相対空間の考え方を取り入れることができないかと考えた。

この原型は、インターナショナルな時代によって失われつつある風土や、それに培われた空間概念を元に、現代建築に落とし込もうと試みたものである。

清水 孝一

SHIMIZU, Koichi

表面張力による水膜の視覚的効果と冷却効果の実証と実用的利用法

Practical use and demonstration of visual effects and the cooling effect of the water film due to surface tension

1. 研究目的

五円玉の穴に水を流すと、表面張力によって穴に水が付着する。表面張力とは、液体の分子同士で集まろうとする力である。その現象を利用することで、今までに活用されていない水の膜ができるのではないかと考え、研究テーマとして「表面張力による水膜」を選定した。また、その水膜に視覚的効果と冷却効果があると仮定した。そして、それらの効果が実際に存在するか検証し、それらの効果がある場合、空間に活かすことが目的である。

2. 実験と調査

2.1. 水の付着実験

水膜パネルに水を付着させるための穴をアクリル板を使用し、選定した。求める水膜の条件は、1.水の付着率が高い、2.強度が高い、3.空隙率が高い、4.レンズ効果が大きい、5.穴が集合したときに綺麗である。板厚、穴の形、穴のサイズの3つの要素の組み合わせ(図1、図2)を変え、設定した5つの条件に合うものを水膜の穴とする。この実験により、板厚3mm、最大対角線が7.5mmの正六角形(図3)を水膜の穴とした。

2.2 視覚的効果に関する実験

水膜自体の見え方と水膜を通した対象物見え方の検証をするため、距離と水の付着量による見え方の実験と空間的スケールの水膜の見え方の実験等を行った。(図5、図6)

2.3 冷却効果に関する実験

サーモグラフィー(赤外線温度測定器)による温度変化の実験を行った。実験目的は、板に水を付着させることで、どのように温度変化が起きるのか検証することである。この実験により、水が付着した板は付着していない板より明らかに温度が低く、日光が当たっても、温度変化が小さいので、水膜には冷却効果があると考えられる。(図4)

2.4 文献調査

『水空間の演出』という著書に記されている水のイメージに「冷たきもの」、「快適な涼しさ」という項目があり、水には冷たさや涼しさを連想させる効果があると判明した。また、「清らかさ」、「美しさ」があり、それらはホテル、ブティック、サロンなどの清潔感が求められる空間と相性が良いことが判明した。

3. 分析

3.1 冷却効果の仕組み

水膜の水が気化し、周囲の熱が奪われることで、冷気が発生する。また、水膜に給水するとき、地面にも水が流れ落ちることで、打ち水と同様の効果が得られ、体感気温を下げる。

3.2 水膜の給水システム

板への水の付着はチューブからの給水によって制御する。フレーム内に灌水チューブを取り入れ、それによって上部まで水を運び、ノズルから穴の空いたパネルに水を供給する。

3.3 水膜の素材

視覚的効果を重視する場合、ポリカーボネート、冷却効果を重視する場合、セラミックなどの多孔質の素材が良い。

4. 展開

4.1 実用的使用例①住宅

住宅の2階テラスに水膜を設置する。水膜の水が気化することで、冷気を生み、その冷気がテラス、そしてダイニングルーム、リビングへと流れていく。また、水膜が外部と住宅内を柔らかく仕切り、住宅内の生活をぼんやりと映し出す。(図7)

4.2 実用的使用例②ビル前広場の休憩所

広場に水膜で出来た休憩所を設置する。外からは中で休憩している人、中からは歩いている人が微かに見える。日光が当たっても、水膜自体は温度が上がりづらく、熱がこもらない。気化することで、冷気を生み、涼むことができる。また、保水性舗装に水が流れることで、打ち水の効果を長持ちさせる。(図8)

4.3 実用的使用例③美容室

アプローチの両壁に水膜を取り入れて、ライトアップすることで空間演出し、また、空間を分ける役目を果たす。スタイリングエリアの壁面には水膜があり、その背後に造花を設置することで、水膜独自の空間演出を行うことができる。(図9)

5. 結論

第2章の水の付着実験、距離と水の付着量による見え方の実験、サーモグラフィーによる温度変化の実験、文献調査によって、視覚的な効果と冷却効果は実証された。第3章で空間における水膜の利用法を分析し、第4章で一般的な空間での利用例を提示した。

よって、この研究においての水膜は、視覚的効果と冷却効果を合わせもった水膜として、空間に適用できる。



図1: 5mmのアクリル板①



図2: 5mmのアクリル板②

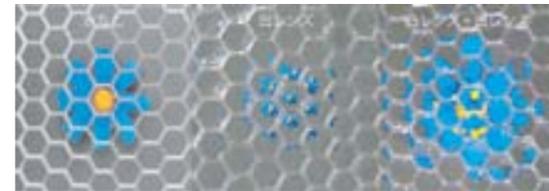


図3: 水の付着量の違いによる見え方の比較

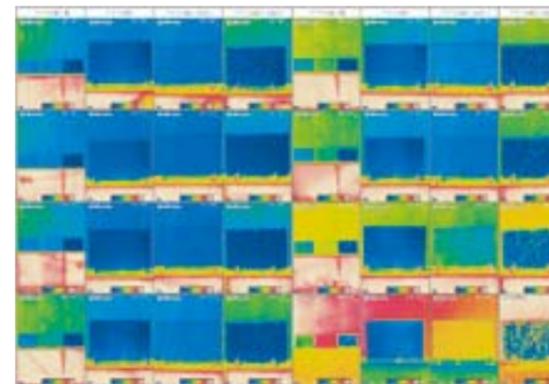


図4: サーモグラフィーによる温度変化の実験



図5: 空間的スケールの水膜の見え方



図6: 水膜と人の距離の違いによる見え方



図7: 実用的使用例①住宅



図8: 実用的使用例②ビル前広場の休憩所



図9: 実用的使用例③美容室

鈴木 理子

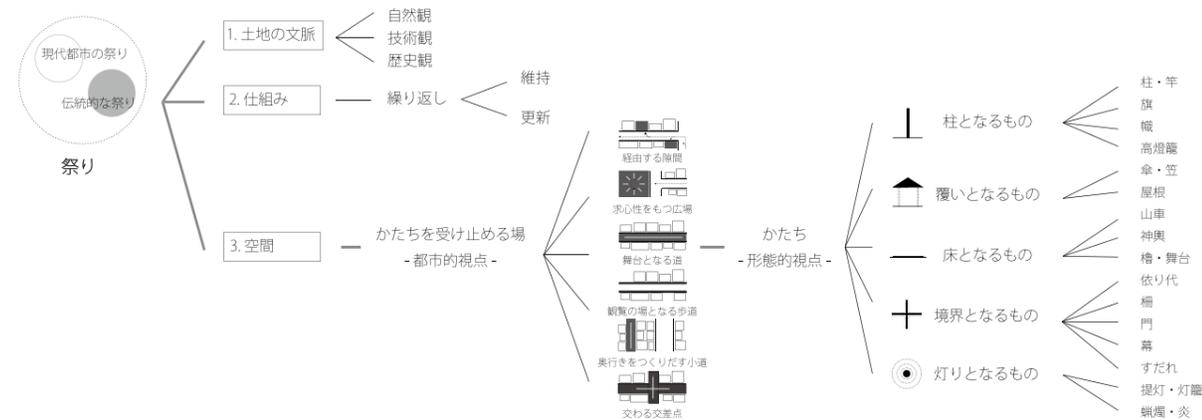
SUZUKI, Satoko

都市の原風景の再生と回帰

祝祭空間における構成要素の抽出とその実践

Regeneration and revolution of original landscape in urban cities

Sampling and realities of structural elements in a festival space



1. 経緯・目的 - 祭りによる都市の原風景の再考 -

近代化により、生産の論理からつくられた建築の生産や土地開発は人々の生活に均質化をもたらし、都市はその固有性を失いつつある。しかし、空間とは本来人の営みや行為から生まれるものであったはずであり、そこから生まれた空間は土地の固有性を包括し、人々の原風景となっていたのではない。

今回私は、土地性と空間の結びつきが強いものとして『祭り』を分析し、デザインにおける応用手法として提案する。

2. 分析・抽出 - 祝祭空間における構成要素の抽出 -

2-1. 伝統的な祭りの調査

祭りの構成要素として3つの要素『土地の文脈』『仕組み』『空間』を定義し、この3つの視点から、空間的要素が強く見られる9つの伝統的な祭り(図1)の調査・分析をおこなった。調査方法としては、文献調査と、ヒアリング調査、各祭りのホームページやパンフレットの参照を主とし、それらを9冊の冊子としてまとめた。



2-2. 祭りを構成する3つの要素

伝統的な祭りの調査をもとに、祭りの構成要素として定義した3つの要素『土地の文脈』『仕組み』『空間』における各祭りの共通項を抽出。その体系図化を試みた。(図2)

1) 土地の文脈 - 土地性

歴史・自然など、その祭りの固有性を生み出す土地の文脈。この空間への取り入れ方のプロセスとして3つの方法を定義。

- ①自然観…土地の自然を素材として取り入れる
- ②技術観…土地に伝わる技術を伝承する
- ③歴史観…土地の歴史・伝統が祭り開催のきっかけとなる

2) 仕組み - 祭りを行う型

『土地の文脈』を取り入れた『かたち』が生まれるために、各地の祭りに共通する仕組みとして『線り返す』という要素を抽出。その中で『維持』『更新』2つの方式があると考えた。

- ①維持型…代々同じ祭具を引き継ぎ、継承・再生
- ②更新型…毎年祭具を更新する

3) 空間 - 象徴化

9つの祭りにおいて、2つの視点

- ①『かたちを受け止める場(都市的視点による6つの分類)』
- ②『かたち(形態的視点による5つの分類)』

から祭空間の関係性を可視化。

そしてこれら2つの視点と、ここで行われている『人の行為』の関係性を分析した。

3. 分析・抽出から得た考察

土地性をもつ伝統的祭りに共通することは、『どの祭りにもあるもの』のなかに、『土地の文脈』を取り入れることで、祭りそのものが都市の原風景となっていることだった。

土地性も歴史も違う多くの祭りで、同じ要素が抽出されるということは、そこに『土地の文脈』を落とし込むことで、祭りという仮設的な文化を通して、都市に彩りを与えることにつながるのではないかと考えた。

4. 提案 - 都市の祭りにおける実践

4-1. 郊外の祭りとの原風景

伝統的な祭りには『土地の文脈』『仕組み』『空間』3つがそろっている。

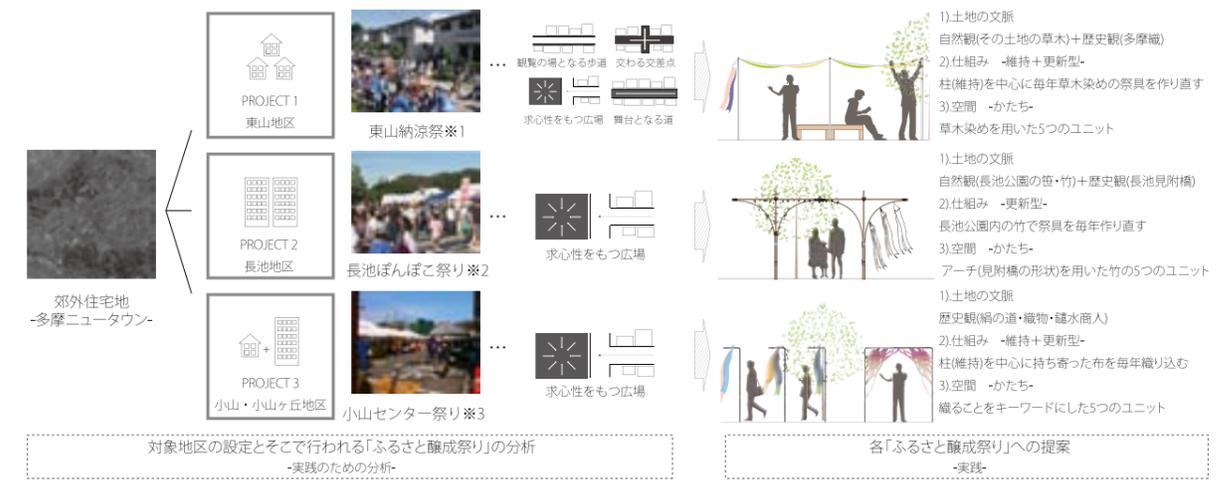
そこでこれらの分析から得たものの検証敷地として、その3つがそろっていない『祭り』が多く行われている『郊外』、そのなかでも多摩ニュータウンでの祭りを対象とする。

これらの祭りに共通して言える問題点としては、消費目的あるいは、それによって祭り空間そのものが均質化していることがいえる。新しく作られた地であるこれらの場所は、歴史や伝統、共同性の不在が指摘されるが、このような場所で近年多くの祭がおこなわれているということは、均質化した都市のなかでその原風景を祭りに見ているといえるのではないか。

4-2. 対象敷地の設定

郊外の代表的な3つの居住形態として、「戸建て住宅地」「団地マンション住宅地」「戸建て+団地マンション住宅地」を定義。そのなかからそれぞれ住民のコミュニティー生成を目的に実際に『ふるさと醸成まつり』の行われている3つの地域』をモデル地域として設定し、それぞれの地区の祭りの空間を提案。

- ①東山地区「東山納涼祭」…戸建て住宅地
- ②長池地区「長池ぼんぼこ祭り」…団地マンション住宅地
- ③小山・小山ヶ丘地区「小山センターまつり」…戸建て+団地マンション住宅地



参考画像
 ※1 多摩ニュータウン東山HP (http://www.tama-higashiyama.jp/s/archive/event07.html)
 ※2 マンションライフ総合支援サイト マンションのWa (https://mansion-wa.com/community/article/num246.html)
 ※3 町田市HP (http://www.city.machida.tokyo.jp/kurashi/tourouku/shisetsu/com06.html)

4-3. 具体的提案

まず、3つの対象敷地の祭りの現状分析として、『かたちを受け止める場-都市的視点による6つのモデル』によって、それぞれの祭りを分析。そして分析から抽出した『かたち(形態的視点による5つの分類)』に、『土地の文脈』をとり入れ、5つのプロトタイプとして空間化し、祭りを通して土地と人々をつなぐ仮設ユニットとしてその更新の『仕組み』とともに提案した。

「祭場の標識に竿を建てるというだけは、ほとんど最初からの約束といっても誤りはない。ひとえに日本のみでなく、いやしくも神が上空からおりたまうものと信じていた民族ならば、皆これを建てたであろう。すなわち大空を行くものの、これが一つの目じるしだったからである。」(柳田国男,『日本の祭り』,54頁,角川ソフィア文庫新版,2013)という柳田国男の言葉にもるように、柱は祭りの原点ともいえる。このことから今回、標示行為として、また建築における構造的要素としての意味合いをもつ、「柱」を今回3つのモデル地区における祝祭空間の中心となるユニットとして提案し、そこから展開する形で、他4つのかたちをそれぞれ提案した。(図3:具体的提案とプロセス)

5. 結論

都市や祭りの風景の均質化は、多摩ニュータウンだけでなく日本全国において言えることである。年に一度土地と人々とがつながる機会である祭りが、過去現在問わず全国各地で行われているのは、伝統的な祭りや都市的な祭りに関わらず、人々がそのような原風景となるものを求めていることの表れであり、生活や環境が均質化してしまったと言われる現代であるからこそ祭りは必要とされるのではないか。また、情報化や、産業化によって、空間が均質化している現代において、『土地の文脈』が取り入れられ、その固有性が強くみられる祭りという存在の再考は、現代の建築や都市の空間そのものを再考することにも繋がるのではないかと私は考える。

曹 涵漪

CAO, Hanyi

上海石庫門建築の保存と改修

上海石庫門団地「東斯文里」の改修提案

Preservation and culture inheritance of the old Shanghai domestic buildings “Shikumen”

背景

石庫門様式の民家は、上海の一大景観であり、この都市の建築文化を構成する重要な部分でもある。

起源は1853年「小刀会」という組織の武装蜂起と、1800年の洪秀全率いる農民軍「太平軍」の上海進入にさかのぼる。当時、多くの外国人や上海近辺の豪商、役人たちが戦乱を避けるために、上海の一角に逃げて避難所を建設した。戦乱の終止後、それは徐々に繁栄し、多くの人々がここに来て定住するようになり、多くの店が開かれた。

そのため、国内外の不動産業が活発になった。彼らは建設土地を買い、住宅を造った。租界周りの土地の価格も徐々に高騰した。純粋な西洋住宅と、伝統的な中国住宅をつくるために多額の資金がつかまされた。こうして、石庫門建築が誕生したのである。

1845年から1949年の間、租界の拡大によって、上海は東アジアの金融・経済の中心地に成長した。上海の租界には、欧米各国のさまざまな建築様式の建築物が建てられ、西洋建築文化と中国の伝統文化が融和した「海派建築」の町並み景観を形成した。その中に、石庫門という民家式住宅の団地が1949年時点で約9,000個以上存在していて、60%以上の上海人が中に住んでいました。中国建国後(1949年)、上海市政府が当時の所有者から石庫門の所有権を没収あるいは買上げた後は、それらの多くで、1棟に複数世帯を入居させた。

1990年代から、上海における都市化が進展し始め、国際的な大都市を目指す都心部では再開発や再整備が急速に行われ、それに伴って多くの新しい建物の建設が進み、高層ビルや分譲集合住宅、道路などの建設により、石庫門の建て替えや取り壊しが発生した。この20年間、約4割の石庫門建築がすでに取り壊された。石庫門建築は徐々に路地の奥に隠れるように残る形になった。

石庫門建築の保存の現状を見ると、外観は立派でも建物内部の老朽化や居住環境の悪化、石庫門建築の商住併用化、庭での増築などの問題が発生している。これらの石庫門建築に対して、今後の保全活用のあり方について検討することが必要である。

目的

石庫門の集中している上海内環区域を調査対象地区として、石庫門建築の利用の現状や空間変容、それらに伴う居住環境の変化などを把握し、石庫門の入居者に対する居住環境の満足度や石庫門の現状への評価、保存意識などについて把握し、その上で、石庫門建築と上海伝統的民家の保存と改築のあり方について研究し、具体的なデザインの方案を提示することを目的とする。

コンセプト

上海で実際の敷地「東斯文里」を選定して、改修の提案を出す。昔と現在の様子を対比して、それぞれの良さを残し、不足な部分を補い足して、石庫門を引き続き住宅としての可能性を研究する。

1860年代(昔)の使用状態：

- 1、上海開埠、租界が現れた当時の外国商会と不動産屋と一緒に投資し、中国の難民を収容する集合住宅が建て始められた。
- 2、大家族制（一家族で10人ぐらいは普通）
- 3、トイレなし、台所、庭付き。

1950年から今の使用状態：

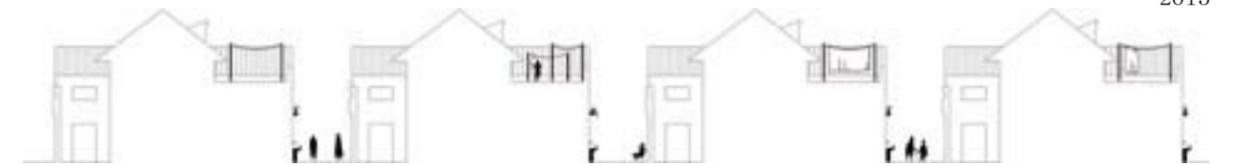
- 1、戦争のため、難民の人数が増加。
- 2、中国沿海地方で大家族制が徐々に消滅する。
- 3、一棟につき少なくとも3-5家族が住んでいる。
- 4、トイレなし、台所共同、庭に部屋を増築。
- 5、難民収容から貧民住宅になった。(主に老人、出稼ぎ労働者)

今後の使用状態（デザイン後の予想）：

- 1、引き続き集合住宅として利用する。
- 2、生活に必要な部分を増築。(トイレ、駐車場、消防用通路など)
- 3、汚い、不便な生活環境を変えて、上海的な風貌がある住宅町に改造する。(特徴を残す)



1910s

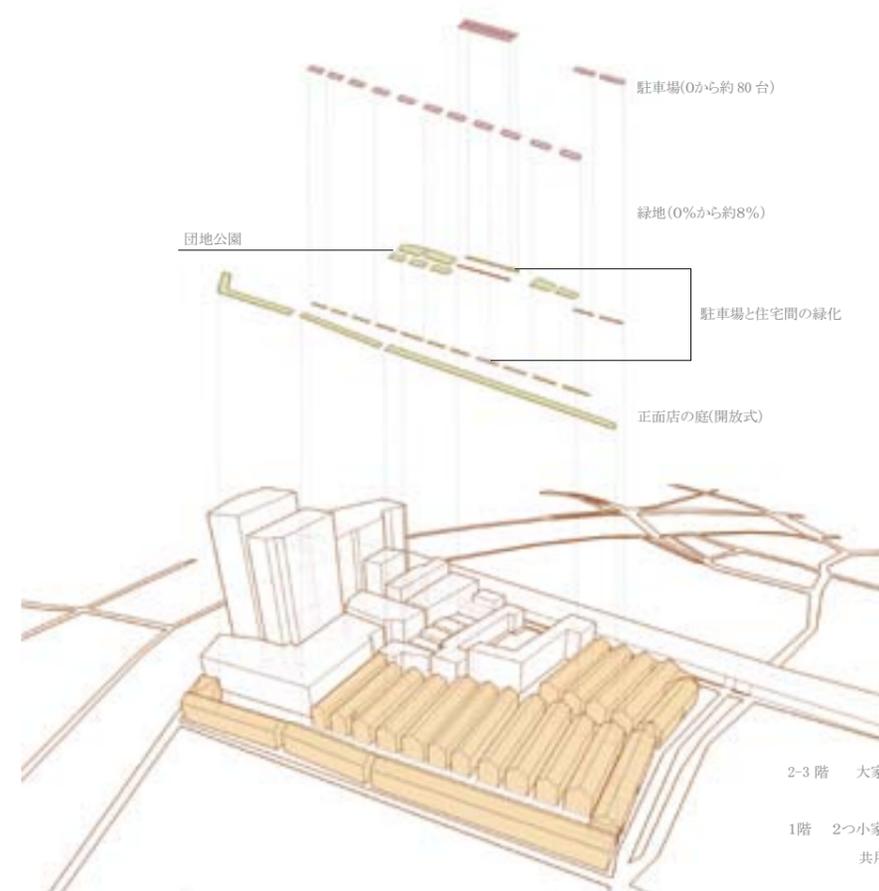


2015



予想

デザイン
廊下の断面図



団地全体の再計画

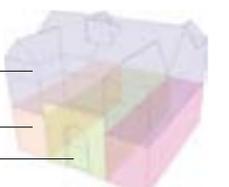
1910s 一世帯



現在(2015) 6世帯以上



予想(設計後) 三世帯



2-3階 大家族用
1階 2つ小家族用
共用空間

空間全体の再計画

武田直

TAKEDA, Nao

polarizing border

偏光板を用いた、他者を鮮明に感じ取る空間の研究

Using a polarizing plate, research into vividly sensing the space of others

私達現代人は、限られたスペースに多くが集中したことによって、本来必要としている身体的距離を保つことが出来なくなり、他者の存在を知覚することを止めてしまった。アメリカの文化人類学者エドワード・ホールはこれを「家畜化」と揶揄する。私達は本来、例え相手が見知らぬ他人だとしても、敬意を持ち、同じ空間を共有出来るはずだ。しかし現在、ホールの言葉を体現するかのように、公共の空間において、他者を気遣う事を忘れ、私有の空間であるかの如く振る舞う人々が増えて来ていると感じている。まるで、他者の存在にモザイクをかけ、見えなくしているかのよう。この研究は、そのような人々に、再び周囲の他者の存在に気付かせ、敬意を払い始めてもらうきっかけを探し求めたものである。

まず、日常生活の中で人の存在を強く意識する瞬間を思い浮かべた。例えば電車に乗っている時に、直ぐ隣に座る人の姿を意識はしない。しかし、トンネルに入り窓の向こうが暗くなった時、そこに映る自分を取り巻く他者の存在に「はっ」とする。他にも、道の角で突然人が現れぶつかりそうになった時や、夜、車のライトに照らされ自分の背後から急に影が延びて来た時等、それまでも近くにいたが気付いておらず、何かをきっかけにして突如その存在を驚きと共に認識した瞬間が、最も明瞭に他者の存在を認めた瞬間ではないだろうか。隠れていた存在を出現させる、またそこにある存在を隠すために、以下の二つの要素に着目した。

・偏光板

光は進行方向に垂直に振動する波である。あらゆる方向の振動が集合したものを自然光といい、縦や横方向等振動に偏りのある光を偏光と言う。あらゆる方向に振動している光から、透過軸と同一方向に振動している光だけを取り出すのが偏光板である。例えば、透過軸が横方向に伸び縦に並ぶ偏光板に、縦方向に揺れる光と横方向に揺れる光が当たると、横方向の光のみが偏光板を通過する。横方向だけになった光は、もう一枚同じ方向に置かれた偏光板に出会ってもそのまま通り抜けるが、90°回転させたもう一枚の偏光板が置かれてしまうと、横方向の光では通り抜けることは出来なくなる。この作用により、偏光板を二枚重ね合わせて回転させると、

光が通過する透明な重なりと、光を遮る黒い重なりが生じることになるのである。

・引き戸

透明な重なりと黒い重なり動きにより、人の輪郭をぼやけさせ、現す。二枚の板の重なり、そして動きという点から引き戸を連想した。そこで、利用者が自ら視覚効果をもたらすことが出来る様な、引き戸で囲まれた空間を制作することに決めた。引き戸にした理由は、「偏光板を重ね合わせる、戻すという動作を自然と行わせることが出来る」という点の他にも、「戸を開ける人以外にも影響を与えることが出来る」点があった。目の前の戸を開けて自分の視界がクリアになると、その隣りにいる誰かの視界はモザイクが掛かったように見えづらいものへと変わってしまう。これは日常生活において、自分の所作が、気付かないところで誰かの見る世界を変えているかもしれないことを表現するものだ。

それは本当に些細なことかもしれない。脚を組んでいて電車に乗っていて、隣の席の女性の服にぶつかり汚してしまったとする。その女性はこれからデートに行く為にお気に入りの服を着て来ていたらどう思うだろうか。せつかくの楽しい気分が台無しになり、世界が曇って見えるはずだ。また、会社に遅れそうになり急いで歩いている時に、とあるグループに道を塞がれていたとしたらどうか。ただでさえ心の余裕が無い時に、前の集団がゆっくりと話しながら歩いていたら、余計に気が立ってしまうのではないだろうか。そう言った、思わぬ所で他者に干渉し、見える世界を変えてしまっている可能性を示唆するための引き戸なのである。

この空間を通して世界を見ることにより、今まで見る事が出来ていなかった様々な存在に気付くだろう。消えては現れ、また消える他者。それは人間のみならず、木々や風景までも取り込んで、自分という小さな存在が、大きな世界の一部であることを教えてくれる。

中央：全体像
 左上：引き戸の動き
 右上：引き戸の動き
 左下：戸を開めた際の見え方
 右下：戸を開めた際の見え方



菟川 聖美

MINOKAWA, Satomi

御堂筋のオフィス街における賑わいづくりについて

オフィス街に住む

Thriving in the business district of the Midosuji

Living in the business district

1. はじめに

日本でも近年ようやく「まちづくり」に対して意識が高まっている。だが単純にまちづくりといってもやり方は無数にある。ソフト重視型もあれば道路の整備から街の起爆剤となるような超高層複合施設を建てるなど様々だ。また行政が行う例、大手ディベロッパーが先導していく例もあれば建築家と施主で長期に渡って街を育てていくこともある。こういった計画は今まで大通りに面したものを取り扱うものが多かった。だがそれだけでは不十分である。実際に表だけよくても一本裏に入ると閑散としていたり、車の通りが激しくとても安心して歩けないような状態のものが実際に存在しているからである。本研究を行う計画地である御堂筋は2000年頃から御堂筋を変えようという動きが出ている。ここでは御堂筋の裏道を取り上げその価値を高め、多くの人がそこに行きたくするような通りを検討していくことを目的とする。

2-1. 御堂筋とは

「御堂筋は梅田から難波までの約4kmを結ぶ幅員44mの幹線街路である。本町をはさんで北に北御堂(西本願寺・津村別院)、南に南御堂(東本願寺掛所)があったことにちなむ道路名である。(中略)御堂筋の拡幅事業は、大正8年(1919)に計画され、大正15年(1926)に着手、全区間の竣工は昭和12(1937)年である。建設費用の一部は沿道に土地を持つ市民から徴収された。国内では初めて受益者負担の制度が採用された道路事業である。淀屋橋以南には銀杏の並木が植栽された。大阪では最初の地下鉄も運行した。沿道には戦前・戦後を通じてオフィスビルが建設され、銀行や企業の本社機能が集積、大阪最大のビジネスセンターとして発展した。1」と述べられており、大阪を象徴する通りである。また「現在の御堂筋あたりはかつて長さ1300m、幅6mほどの短く狭い道だった。そんな道を現在のような大通りにつくりかえたのは大正時代、1923年に大阪市長に就任した関一の都市計画とその思いに応えた大阪を愛する人たちだった。2」というところからまちの成り立ちにも大阪人の気質が現れている。

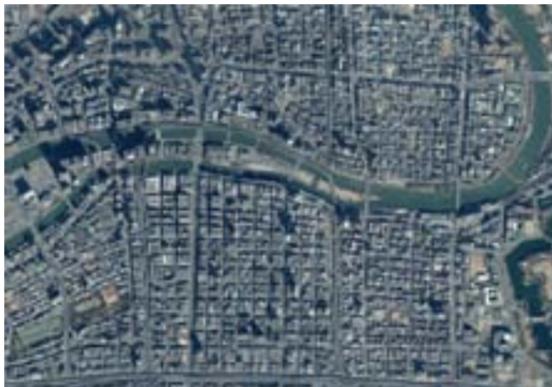


図1:大阪市 北が梅田 東(右下)が大坂城



図2:敷地 赤い部分が対象敷地 青い部分が御堂筋

2-2. 御堂筋の歴史

このあたりは豊臣秀吉の時代に大阪城の造成に着手した際、それにともない大阪城下も基盤の目に整備された。この城下町には平野郷、堺、伏見などの古いまちから移ってきた町人たちが家を構えた。その当時、江戸、熊本や金沢などの他の城下町では、7割から8割が侍屋敷であるのに対して大坂の4分の3が町人町であったということが、庶民的な生活文化の伝統を育んだだけでなく、大阪の「住民主体のまちづくり」という面での道路幅拡大にも受け継がれ、そして今日までそれは引き継がれている。大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡して、

市中は一時荒廃したが、徳川氏により大坂城主に起用された松平忠明は焼けた町の復興政策の一環として船場を南北に二分し、それぞれに町人の元締衆を指名し惣会所を設け、町政を行わせた。また河川改修など積極的なまちづくりで離散した町民を呼び戻し、「天下の台所・大坂」の発展の基礎を築いた。その当時御堂筋と呼ばれていた区間は船場の淡路町～博労町のみで多くの問屋が軒を並べる賑やかな通りだったが道幅はわずか約5.4mという今からでは考えられないような狭さであった。それが今の43.6mに拡張されるきっかけは大正時代に関一市長の打ち出した「都市大改造計画」のメイン事業である「御堂筋拡幅工事」であった。100年先を見据えたこの計画は建物の高さを100尺(31m)に制限し整然とした景観をつくるものであり、パリをはじめとしたヨーロッパを模範として作られた。当時の常識ではありえないほどの大事業であったが、以前は東西軸である「通り」が交通の中心であったのに対し明治期以降、梅田と難波に駅ができて南北軸の必要性が高まっていた。この計画には道路幅だけでなくどまらず、道路の下に電車を走らせるというものだった。1930年ようやく道路幅、電柱の完全地中化、地下鉄同時開発という壮大な工事に着工した。そして長きに渡る工事が1937年に終了。そしてシンボルでもあるイチョウもこの時に植えられたものである。こうして完成した御堂筋は、その後もシンボルとして支え続け高度経済成長期も発展していく。

2-3. 現状把握と改善点

本研究で対象としている地区は御堂筋の梅田(堂島)～難波間のうちの淀屋橋～本町間のオフィス街である。エリア別の特徴としては北から順に中之島には図書館や美術館、中之島公会堂などがあることから文化的なエリアとされている。そこから淀屋橋～本町はオフィス街で途中の阪神高速道路の高架下にある船場センタービルを超えると徐々に心齋橋へ向けて商業エリアとなる。心齋橋～難波間は完全な商業エリアとなっている。

3-1. 改善手法と事例

本地域は先ほども説明したが、大きくみて中之島という「文化のエリア」そして心齋橋・難波の「商業エリア」の中間にある「ビジネスエリア」である。またそのオフィス街をいうイメージ、実際サラリーマンを対象とした店舗ばかりなので、休日にも賑わいを出すために「脱オフィス街」を計画しなければならない。

3-2. オフィス街都市再生

例として東京丸の内にあるオフィス街があげられる。今や華やかで休日でも人で賑わう丸の内もかつて、1990年代後半ごろには「黄昏の街、丸の内」と揶揄されたこともあった。御堂筋と違い、丸の内を引っ張っていく三菱地所という大手ディベロッパーがいたということが大きい。また、高層ビルを次々と建設していったというところから垂直型の開発といえる。

3-3. 裏道ながらも文化を築きながら街に存在感を出しているもの

他の例として「日本橋室町東地区開発計画」がある。日本橋地域は老舗商店がたくさんあり、また老舗百貨店もある歴史と文化伝統の街である。その日本橋の地元企業である三井不動産が地元の企業と共に、「残しながら、蘇らせながら、創っていく」をコンセプトに「日本橋再生計画」を進めている。その結果としてCOREDO日本橋、COREDO室町などが続々と建った。この計画で注目すべき点は、表だけでなく、裏通りもしっかり整備されているところだ。

4-1. 提案と前提

淀屋橋の問題として、休日に人の気配がなくなるというところから、まずは人がいる状態をつくるのが重要なのであると考え、集合住宅とオフィスを提案した。集合住宅のテーマは「職住近接型」である。

4-2. プログラム(住居棟)

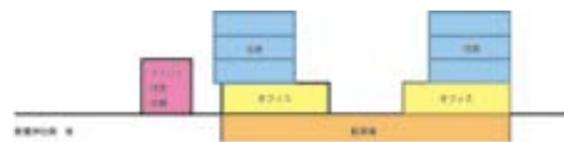
この場をどんな人が利用するのかについてだが、単身者や若い夫婦2人までを想定している。住居としては、①この近辺の企業に勤めている単身者②この近辺にどちらかが勤めている夫婦③このオフィスを利用し、住居も利用している単身者④どちらか(どちらも)がこのオフィスを利用し、住居も利用している夫婦、という設定のもと住居部分を設計している。

4-3. プログラム(オフィス棟)

オフィス棟は2階建ての計4棟からなり、それぞれに特徴を持っている。①賃貸オフィスの他に御堂筋のまちおこしの団体がはいつている。②クリエイティブな職種の人のためのオフィス。③学びをテーマにした棟。オフィスの他、100人規模のイベントスペースがあり、講演会や勉強会が開かれる。④シェアオフィス。

4-4. 長屋棟(SOHO的くらしかた)

3階建てになっており、1階を店舗、2階をアトリエ、3階を住居として設計した。ここではSOHO的暮らし方ができる。



5. さいごに

都市における奥行き的重要性と結論としてまずは人の気配をつくるのが重要だと述べてきた。日本人にとって奥は特別な場所という位置づけであるが、御堂筋から一本入ったエリアはその奥が「裏」となり駐車場ばかりで死んだスペースとなっている。この様な場所からどんだん公共空間の利活用をすすめながら地域の活性化を推進していくべきである。

参考図

図1、図2 YAHOO! 地図 (<http://map.yahoo.co.jp/>)

出典1 橋爪紳也著「大阪のひきだし 都市再生のフィールド」

出典2 安藤忠雄著「安藤忠雄とその記憶」

李昕若

LI, Xinruo

横浜中華街の華僑文化

「裏中華街の家」横浜中華街のための公共空間提案

Study on the ethnic Chinese culture of Yokohama Chinatown

Public space proposed for the Yokohama Chinatown "the hidden Chinatown house"

1. 研究概要

現在、横浜中華街というと、多くの人が「飲食店街」というイメージしか持っておらず、横浜の観光地の一つとして捉えている。しかし、テーマパーク観光地ではなく、横浜開港以来、多くの苦難を乗り越えてきた華僑・華人が自分のアイデンティティをしっかりと根に据えて創り上げた街であり、生活の場であり、共同社会である。何世代にもわたった華僑の人々が、自分の生活を営み続けるため、社会、経済の変化に対応し、中国本土でもない、日本でもないユニークな「中華街文化」を創出した。しかし、エスニック観光スポットとして発展していく中華街の主役となる華僑社会が、徐々に三代目・四代目華僑を中心とする構成になっていくにつれ、中国人としての意識が薄くなったり、日本社会に同化し、中華街を離れて行く人が増加している。また、近年では留学・就労で日本に来た中国人は、中華街を観光地として捉え、無関心な人がほとんどである。それに対して、中華街に育った二世・三世の華僑は、中華街を自分のふるさとして見られ、若い世代の華僑を中華街に呼び戻し、伝統文化への関心を呼びおこすことを工夫している。

このような背景のもと、本研究では中華街の商業、行事と華僑文化発展の関係性を研究した上で、若い世代の華僑・華人を中華街の街づくり・文化イベントに参加させる仕組みを提案し、そのための公共空間を設計することにより、商業発展と文化伝承が両立できる環境を作ることを目的にしている。

2. 提案

本提案「裏中華街の家」は、中華街の商業空間と生活空間の中間地帯にある「山下町公園」周辺に位置し、独自性のある文化を持つ中華街社会のために、イベント・伝統行事・生活・コミュニケーション・教育など様々なシーンに応じる公共空間の提案である。

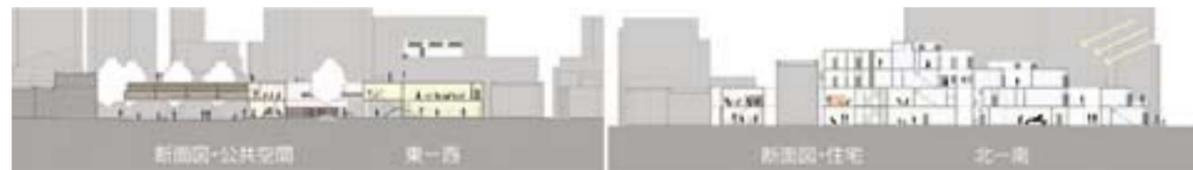


図1: 断面図・公共空間

図2: 断面図・住宅

仕組みのコンセプト

「中華街のファン」と「中華街のスタッフ」を作る。

中華街のファンを作るには、今のように料理・公演を提供することだけでなく、料理文化と伝統行事の文化を理解させ、中華風の魅力をいろいろな面で体験させることが大事である。また、中華街の環境を整備し、中華街住民とのコミュニケーションを増やすことも重要である。

中華街のスタッフを作るには、まずは無関心な華僑たち、特に若者に、中華街の仕事に参加させることが必要である。ボランティアやアルバイトなどの形で、いままでのサービスを受ける客の立場から、サービスを提供し、自分の民族の文化をアピールする主人に変わると、中華街に住んでいる華僑たちの気持ちが分かり、中華街をさらにいい町に作る思いが高まるのではないか。

空間のコンセプト

日常と非日常、内部と外部の境界から空間を考え直す。

華僑の生活と行事を分析した結果から見ると、中華街の各空間の役割は、一年中いつでも同じではなく、毎日の行事に応じて機能が変るのである。それに、土地が高い区域のため、街の隅々まで使われ、どこにも余白がない狭さを感じられる。このような現状に対して、本提案では、空間を柔軟に使い、華僑中心の行事ならプライベート性を重視し、華僑の隠れ家みたいな居心地のいい場所を作り、観光客と一緒に祝う大規模のイベントなら開放的な空間に変わるコンセプトを立てた。並べる空間から、重なる空間になることによって、空間が節約され、中華街に余白ができ、華僑にとってより生活しやすい、訪ねる人にとってよりゆっくり楽しめる街に変わることができる。



敷地
図3: 敷地



図4: 1階平面図



図5: 2階平面図



図6: 断面図・住宅